



# NEWS LETTER

## 11

March 2021 Number

## ご挨拶

演劇映像学連携研究拠点代表 岡室 美奈子

演劇博物館が運営する演劇映像学連携研究拠点は、2009年度に文部科学省から認定を受けた共同利用・共同研究拠点として活動を発展させてきました。本拠点の特色は、100万点を超える資料を収蔵する演劇博物館が母体であることを活かし、演劇博物館の収蔵資料のうち十分に学術利用がなされていない貴重な未公開資料・非公開資料を共同研究に供することにあります。これまでの多彩な成果が認められ、2020年度には3度目の認定を受けて新たな活動を開始しました。

しかし、本年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、従来のように一次資料の現物に触れながら対面で行う共同研究が困難となりました。本拠点はこの試練に直面し、コロナ禍に対応した共同研究のあり方として、一次資料を撮影したデジタル画像とオンライン会議ツールを活用し、遠隔地でも共同研究が推進できる体制を整えました。

こうしたなか、本拠点の核となる一次資料を対象とする共同研究では、デジタル化されているがデータベース公開されていない資料、および新規撮影を行う資料を中心に対象資料を選定しました。これにより、本拠点が研究テーマを提案する「テーマ研究」として別役実旧蔵草稿資料に関する研究課題を採択し、演劇博物館の貴重な資料を研究対象とする共同研究課題を全国から募集する「公募研究」については、アーニー・パイル劇場関連資料、栗原重一旧蔵楽譜、戦前の映画館広報資料、役者絵本、常磐津節正本板木を対象とする研究チーム5件を採択しました。

### contents

■拠点代表あいさつ	1 p
■特別テーマ研究・奨励研究成果報告	2 p
■令和2（2020）年度 テーマ研究成果報告	4 p
■令和2（2020）年度 公募研究成果報告	5 p
■拠点主催事業	10 p
■Mission and Vision	11 p
■Report on urgent theme research/encouragement research findings	12 p
■Report on principal research findings, fiscal 2020	14 p
■Report on selected research findings, fiscal 2020	15 p
■Projects organized by the Center	20 p



オンライン展示「失われた公演：コロナ禍と演劇の記録／記憶」トップページ  
Lost in Pandemic: Archiving Theatrical Memories and Records of 2020

また、本年度は新たに2つの課題区分を設けました。まず、演劇博物館の若手研究者による将来の共同研究に向けた演劇・映像資料の調査プロジェクトとして「奨励研究」を設け、6件の課題を採択しました。また、コロナ禍における演劇文化の状況を調査・記録する共同研究として「特別テーマ研究」を設け、コロナ禍にで中止・延期された国内・国外の舞台公演情報と動向を調査する共同研究課題、および博物館・美術館・図書館における感染拡大予防策に関する調査を実施し、成果であるオンライン展示「失われた公演」は特に各種メディアから注目を集めました。

こうした共同研究チームによる共同研究事業に加え、デジタルデータを活用した将来的な研究の展開を見据え、これまで蓄積されてきたデジタルデータの活用方法の開拓と検討を行いました。具体的には、①浄瑠璃丸本のデジタル画像を利用して凸版印刷株式会社と2016年から進めている「くずし字OCR」事業の成果を教育利用に活かすワークショップの実施、②舞台公演に関するジャンル横断的なメタデータ蓄積の課題と可能性に関する研究会の開催、③欠落などをふくむ貴重なサイレント映画の展示利用を行うための、デジタルデータによる字幕情報等の補完・修正と、弁士の語りや音楽の収録を行いました。

本拠点はコロナ禍のなかで第三期の活動を開始するという試練に見舞われましたが、この試練を糧に、演劇博物館が蓄積してきたデジタルアーカイブのノウハウと豊富なデジタルデータを活かし、新しい共同利用・共同研究拠点のあり方を提示し、豊かな成果を上げることができました。一層工夫を重ねて参りますので、これからも皆さまのご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

# 特別テーマ研究・奨励研究成果報告

本拠点では2020年度、国内外のコロナ禍における国内外の舞台公演、および博物館・図書館・美術館の感染症対策に関する調査を行う「特別テーマ研究」と、今後の本拠点の共同研究の基礎調査を行う「奨励研究」という課題区分を設け、事業の拡充を図りました。

## 特別テーマ研究課題1

### 新型コロナウイルス感染症の影響下における日本演劇界の調査研究

研究代表者：後藤隆基（早稲田大学演劇博物館助教）

研究分担者：高萩宏（東京芸術劇場副館長）、内田洋一（文化ジャーナリスト）、阿児雄之（東京国立博物館学芸企画部博物館情報課情報管理室主任研究員）、橋爪勇介（美術出版社ウェブ版『美術手帖』編集長）、埋忠美沙（お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系准教授）

2020年の日本の舞台芸術界は、2月下旬以降、新型コロナウイルス感染症（以下「コロナ禍」と略記）の感染拡大の影響を受けて、数多くの公演が中止あるいは延期を余儀なくされた。とくに4月7日に特別措置法にもとづく緊急事態宣言が発出されたことで、さまざまなジャンルで、文化産業が機能を停止した。その期限は小出しに延長されつづき、5月25日に宣言解除。舞台芸術分野においては、ガイドラインに沿った細心の対策をとったうえで、徐々に劇場再開の動きがはじまっているが、公演関係者に感染者が出たり、社会全体の感染者数が増加したり、常に薄氷を踏むような情勢の下で公演がおこなわれている。

本研究では、コロナ禍による中止・延期公演の実態調査を中心に、情報の集積と資料収集をおこなってきた。コロナ禍の影響下にある〈現在〉を演劇という視座から歴史化すること。かつ2020年に上演が叶わなかった公演を、関係者個々の「記憶」の内側にのみとどめず、公の「記録」としてまとめ、後世に伝えることを企図したものである。具体的には、中止・延期公演のリスト化と関連年表稿の作成を進めるとともに、それらの成果の一部は、チラシ画像等を用いたオンライン展示「失われた公演——コロナ禍と演劇の記録／記憶」（<https://www.waseda.jp/prj-ushinawareta/>）として、最初の緊急事態宣言発出から半年にあたる10月7日から公開を開始した。

当初公開したチラシ等の画像は63点。2021年1月5日現在では150点となった（チラシも含めた提供資料数は620点以上）。公演関係者からのコメント等も併載することで、事態に遭遇した方々の「言葉」による記憶のアーカイブをめざした。くわえて、単体の公演だけでなく、コロナ禍に見舞われた舞台芸術界についてのメッセージも、多くの方からご寄稿いただいている。

当館の調査では2月下旬以降、1200公演以上の公演（ステージ数ではなく、タイトルで計数している）が中止・延期されたことがわかっているものの、それらすべてに資料提供依頼等のアクセスができておらず、まだ調査の届いてい

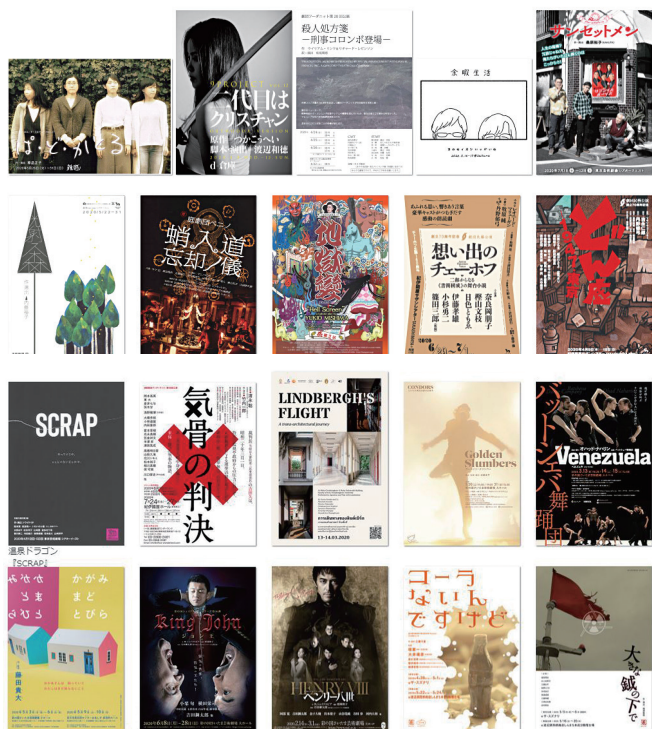
ない公演も多い。今後も関係機関等の協力を仰ぎながら、中止・延期公演の実態調査と資料収集を継続し、オンライン展示も随時更新していく予定である。

また、2021年度春季企画展として、本研究によって得られた情報や知見、資料等を用いた現物展示を開催予定であり、舞台芸術を通してコロナ禍に覆われた時代相を浮かびあがらせたい。オンライン展示や現物展示に関しては、各分野の専門家である、本研究の研究分担者に助言をいただきながら、企画を検討し、準備を進めていく。

失われた公演      このサイトについて      チラシを閲覧する      舞台関係者からのメッセージ      資料ご寄贈のお願い

チラシを閲覧する      Q.公演情報検索→「コメントから閲覧する」へ→

登録が古い順      登録が新しい順      登録



オンライン展示「失われた公演：コロナ禍と演劇の記録／記憶」  
チラシ一覧ページ

Lost in Pandemic: Archiving Theatrical Memories  
and Records of 2020 (Flyer List)



## 特別テーマ研究2

### COVID-19 影響下の舞台芸術——欧米圏の場合

研究代表者：伊藤 倫（早稲田大学演劇博物館助手）

研究分担者：萩原 健（明治大学国際日本学部教授）、藤井 慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）、田尻 陽一（関西外国語大学名誉教授）、戸谷 陽子（お茶の水女子大学人文科学系教授）、大崎 さやの（イタリア演劇研究家）、辻佐 保子（早稲田大学文学学術院講師（任期付））、田中 里奈（明治大学国際日本学部助教）

本研究プロジェクトでは、欧米圏（フランス、ドイツ、オーストリア、スペイン、イタリア、イギリス、アメリカ合衆国、ロシア）を対象としたコロナ禍における舞台芸術の状況と文化政策を調査した。各国の文化政策、演劇界の状況も様々であるため、参加者各自が専門とする言語圏の主要な都市圏を対象に調査し、2020年9月以降、月に一度の研究会をオンラインで行なってきた。国外の舞台芸術の状況に関する報告は、日本国内においても各種媒体で確認できるが、本テーマ研究では、広く社会との関係という観点から、文化政策を軸に、各国の舞台芸術状況を中長期的な視野で捉えることを目的とした。

欧米圏では、3月中旬にコロナウイルス感染拡大の第一波が確認されてから、迅速な文化支援策が発表され、各国政府は率先して文化活動を保護しようとしているかのようにも見えた。例えば、フランスでは3月18日、ドイツでは3月23日に大規模な緊急支援策が発表された。しかし、こ

うした文化政策も「手厚い保護」と簡潔に評価できるほどに事態は単純ではない。また、フランスやドイツに比べ、ロシアではコロナ禍を受けた明確な支援策は確認しがたい点も指摘されるだろう。あるいは、ドイツでは文化政策の主体が州ごとであるのに対し、オーストリアでは連邦政府が文化政策の舵取りを行なっているように、各国内においても、その文化政策の状況は非常に様々である。なお収束の道筋が見えないコロナ禍にあって、本テーマ研究プロジェクトが提示できるのは、あくまで限定的な側面にすぎないが、各国がこうした状況の中で、どのように文化を捉え位置付けていたか、どのような対応が確認できたかを記録し、のちの調査研究のための情報として残すことで、社会に還元することを重視した。本テーマ研究の成果は、演劇博物館演劇映像学連携拠点HP、および2021年春季企画展における配布物で公開予定である。

## 特別テーマ研究3

### 博物館・美術館・図書館における新型コロナウイルス感染拡大予防策に関する調査

研究代表者：佐藤 夕紀（早稲田大学演劇博物館補修係）、久利 希（早稲田大学演劇博物館補修係）

新型コロナウイルス感染症が拡大した2020年度、演劇博物館も長期の休館を余儀なくされた。演劇博物館の補修係ではこの休館に際し、演劇博物館が再開館時に求められる対策、また資料の扱いに求められる感染症対策を調査した。国内外の博物館・美術館・図書館関係団体のWEBサイトを中心に、博物館等施設の再開へ向けた対策の情報収集を行った。この調査は、日本博物館協会と日本図書館協会がガイドラインを公表し、基本的な感染症対策の指針が示された5月14日時点でひと区切りとした。その後、調査結果は5月19日に「博物館・美術館・図書館における新

型コロナウイルス感染拡大予防策に関する調査報告」としてまとめ、演劇映像学連携研究拠点のウェブサイト上で公開した。報告書では、5月中旬時点までに国内および国外の博物館・美術館・図書館関係団体が公表した新型コロナウイルス感染拡大予防策を「調査リスト」にまとめてその傾向を記し、他の施設との情報共有を図るとともに、この時期の試行錯誤の記録を将来に残すことを目指した。なお、報告書発表後の動向を踏まえ、演劇博物館の年報『Enpaku Book』には、報告書の概要とともに、感染症拡大防止策としての資料の隔離・消毒の情報を紹介した。

## 奨励研究課題

本拠点では2020年度より、演劇博物館の若手研究者が将来の共同研究に向けて演劇・映像資料の調査を行うプロジェクトとして「奨励研究」を実施することとした。初年度である2020年度には、①「人形浄瑠璃を主とする太閤記物近世演劇の基礎資料調査と研究」（原田真澄）、②「土方与志のモスクワでの生活」（伊藤 倫）、③「初代水谷八重子資料の調査による貫戦期新派の研究」（後藤隆基）、④「日本映画産業にみる性的少数者の表象をめぐる作品製

作・興行・解釈に関する基礎研究」（久保豊）、⑤「近代日本における『桃花扇』の受容について——東京専門学校を中心に」（李思漢）、⑥「松竹座チェーンの興行における映画上映とアトラクション上演」（柴田康太郎）の研究課題が採択され、多岐にわたる演劇博物館の資料の考証が進められた。これらのうち、④の成果はすでに2020年度の演劇博物館の企画展示に結実した。また③の成果も来年度の企画展で公開される予定である。

## テーマ研究

# 1

## 別役実草稿研究

研究代表者：梅山いつき（近畿大学文芸学部准教授）

研究分担者：岡室美奈子（早稲田大学文学学術院教授、演劇博物館館長）、後藤隆基（早稲田大学演劇博物館助教）

### 【研究目的】

本研究は、2019年に寄贈された「別役実自筆原稿」および、別役作品に関連する資料の調査を通して、別役の劇文体について検証するものである。別役は劇作を開始した当初より、サミュエル・ベケットを筆頭とする不条理劇から影響を受けていたが、同時に、宮沢賢治らの文芸作品や童謡、唱歌、古歌などにも関心を寄せ、創作に取り入れていた。この傾向は1990年代後半以降、さらに顕著になる。本研究では、そうした演劇作品以外の言葉が別役の劇文体にどのような影響を与えたのか、さらには、それらは不条理劇から別役が獲得した劇構造や言語感覚にどう接続されていたのかを検証する。

### 【研究成果の概要】

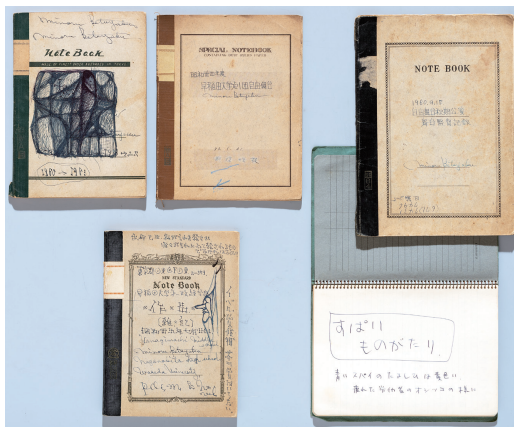
「別役実自筆原稿」とは、主に演劇作品の草稿類であり、寄贈後、本研究の分担者でもある後藤隆基によって整理が進められ、そのうち未発表作品が2020年に雑誌掲載されたことで話題となった。整理済101点のうち、戯曲集として刊行されていないものは37点あり、さらに、これとは別に追加寄贈を受けた未整理資料もある。

本年は、合計5回の資料調査及び、別役が創刊に携わった同人誌『季刊 評論』（1969～1986年）の関係者との面談を行った。『季刊 評論』は、別役が評論活

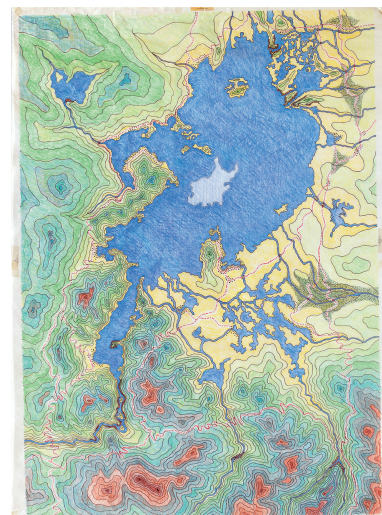
動を通して不条理劇をどのように受容したのか明らかにする上で重要な資料である。本年は、当雑誌の編集者だった野田映史氏と面談を行い、当雑誌と別役の影響関係についてお話を伺える関係者情報等についてアドバイスをいただいた。新型コロナウイルスの感染が終息し次第、次年度は可能な限り、関係者からのヒアリングを行いたい。

本年の資料調査は、全容把握を目的としたため、詳細を精査するには至っていないが、60年代の初期作品に関係する重要な資料が含まれていることが明らかとなった。また、十代の頃の文集や、二十代の頃のものと思われる創作ノート、また、『そよそ族』シリーズを手がけるにあたって、別役自身が手がけた地図等、作品完成までのプロセスを辿れる重要な資料も発見された。

次年度はこうした貴重資料を中心に、内容を精査していくと同時に、演劇博物館の特別展として別役実展を開催し、研究成果の一部を広く公開する予定である。最後に、本研究を遂行するにあたり、チームメンバーのみならず、演劇博物館の館員の皆さん、拠点事務局の方々に多大なるご協力をいただいた。資料整理にあたっては、博物系のスタッフにご協力いただき、効率的に調査を進めることができた。あらためて感謝申し上げます。



創作ノート  
Creative writing notebooks



『そよそ族』地図  
Soyosoyozoku map



公募研究

1

## 千田資料によるアーニー・パイル劇場の基礎研究 ——1946年から1948年までの伊藤道郎の舞踊実践と ジャンルを越境した活動記録

研究代表者：串田紀代美（実践女子大学文学部准教授）

研究分担者：山田小夜歌（日本女子大学家政学部助教）、タラ・ロッドマン（カリフォルニア大学アーバイン校芸術学部助教）

### 【研究目的】

アーニー・パイル劇場は、占領下の東京宝塚劇場を接收し、1945年12月24日から1955年1月27日まで存在した連合軍専用慰安施設である。この劇場の製作監督が、千田是也の実兄でブロードウェイやハリウッドで活躍した伊藤道郎（1893-1961）である。本研究は、千田是也コレクションに含まれる伊藤道郎関連資料の中で、特にアーニー・パイル劇場に関する資料の調査と分析を行うことを目的としており、戦後の日本でジャンル横断的に活動した伊藤道郎の舞踊創作の再評価を目指す。

### 【研究成果の概要】

今年度は千田資料の伊藤道郎関連資料（以下、J資料群）のデジタル化と目録作成を行うとともに、すでにデータベース化されている資料の調査と考証を進めた。とりわけ調査研究に重点を置いた資料は、アーニー・パイル劇場関連文書、伊藤道郎とアーニー・パイル劇場専属舞踊団の関連写真、スクラップブックの新聞雑誌記事、「タバスコ」台本、伊藤道郎の舞台ノート等である。当該資料の考証を通して、これまで実態の解明が難しかったアーニー・パイル劇場の内部機構や興行システムを把握し、1946年から1948年前半までの日本側舞台製作スタッフによる上演作品（13作品）および伊藤道郎の上演作品（5作品）をほぼ特定することができた。

同時に、上演作品を正確に裏付けるために米国国立公文書館所蔵「占領期日本関連資料」に含まれる写真記録を調査しているロッドマンと串田が、両資料の比較検討を行った。その結果、J資料群の写真は米国国立公文書館所蔵の写真記録と一致しないが、類似する写真が含まれていることが確認された。

これらを踏まえ、12月末にチーム内での中間報告会を実施した。ロッドマンはアーニー・パイル劇場の写真を考証した上で、伊藤道郎の舞踊作品

（レパートリー）とダンススタイルの特徴、上演作品と米国ラテン・ブームとの関連性について言及した。具体的には、J資料群の写真のうち裏面に Signal Corps U.S. Army の印字があるものは、米陸軍通信局の写真家が占領下日本の状況を本国に報告するための写真記録であったこと、米国の「ラテン・ブーム」がルーズベルト政権下の「善隣政策」に起因していたことを指摘した。代表作「タバスコ」が繰り広げる陽気なラテンのダンスとリズムは、占領軍の観客に対して懐かしさと至福のひと時に浸る装置であったといえよう。串田はJ資料群の写真から上演作品と時期を特定した上で、各資料には異なる種類の写真が順不同で収められていることを指摘した。さらに、公募により結成された劇場専属舞踊団の成長を考慮し、難易度に応じて「和物」から民族舞踊を経て「洋物」へという上演の流れを作った伊藤道郎の演出戦略を、公演年表作成の上で確認した。この成果は、「アーニー・パイル劇場のステージ・ショー」（『実践女子大学美術史』35、2021年3月刊行予定）、「伊藤道郎の舞踊創作と特徴—関係者の証言から探るアーニー・パイル劇場のステージ・ショー」（『実践女子大学文学部紀要』63、2021年3月刊行予定）にまとめた。



伊藤道郎とアーニー・パイル  
交響楽団（1946年12月6日）  
[SND-J5-017\_01]  
Michio Ito and the Ernie Pyle  
Orchestra (December 6, 1946)



南米風の衣装でポーズする専属舞踊団員  
「アーニエット」[SND-J1-12\_014\_014\_01]  
The “Ernettes” resident dance troupe  
posing in South American-style  
costumes

## 栗原重一旧蔵楽譜を中心とした楽士・楽団研究 ——昭和初期の演劇・映画と音楽

研究代表者：中野正昭（明治大学文学部兼任講師）

研究分担者：白井史人（名古屋外国語大学世界教養学部講師）、毛利眞人（音楽評論家、早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、山上揚平（東京大学大学院総合文化研究科特任講師）、小島広之（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

### 【研究目的】

栗原重一（1897-1983）は昭和初期にエノケン楽団、松竹キネマ演芸部、さらにトーキー初期のPCL映画製作所などで活躍した音楽家である。本研究はその旧蔵楽譜の一部である「エノケン楽団・栗原重一旧蔵楽譜（約1000点）」の調査・分析を行う。2019年度までに実施した楽譜資料（約700点）の基礎調査の成果を踏まえ、同時代の文献資料や、関連する楽譜コレクションの調査を組み合わせ研究を進める。栗原がともに活動した榎本健一（1904-1970）およびその周辺の楽士・楽団の活動実態の実証的研究を通して、広く同時代の演劇、音楽、映画を横断する興行や作品生成の過程を解明することを目指す。

### 【研究成果の概要】

#### ○楽譜資料の調査・分析

昨年度までの2年間の調査を通じて、栗原旧蔵楽譜資料のうち、2016年度に購入した第1次購入分と、第2次購入分の一部の約700点の目録を作成し、輸入譜や作品別の手稿譜などが混在する資料の概要を把握した。本年度は、新たにデジタル化した約400点の資料のうち約200点に関して、分担者・小島を中心に目録作成を進め、概要を把握することができた。

今回新たにデジタル化された資料は、昨年度までの調査で明らかとなった楽譜資料と同種の印刷譜および手稿譜が中心である。昨年度に実施した瀬川昌久氏へのインタビューおよび調査の成果を踏まえると、館蔵資料は、栗原の没後に瀬川氏が譲渡された状態から一部が散逸しており、別系統の楽譜資料も若干数混在している可能性が高い。所蔵印や楽曲の出典調査を体系的に進展させたことで、本資料群の収集・保存・使用のプロセスを明らかにするためのより詳細な調査の基盤を築くことができた。今後は、演奏上の指示や日本語

訳された歌詞などの書き込みの詳細に関する調査へとつなげていく。

#### ○同時代の楽譜コレクションや関連資料のデジタル化および考証

瀬川昌久氏の旧蔵資料のうち、栗原重一と同時代に活動していた音楽家・菊池滋彌関連の資料や、昨年度に購入した榎本健一関連の舞台写真アルバムをデジタル化した。さらに分担者によるオンラインでの内部検討会を経て、2021年2月15日に中間報告として研究会を実施し、栗原資料と関連資料との考証を進めた。コロナ禍における調査および考証には課題も残ったが、デジタル化資料を活用した目録作成とオンラインでの研究会で一定の成果が挙げられた。今後、インタビュー調査、演奏や上映などを含めた楽譜資料の活用、国内の関連する資料館での調査などをいかに持続させるか、模索していきたい。

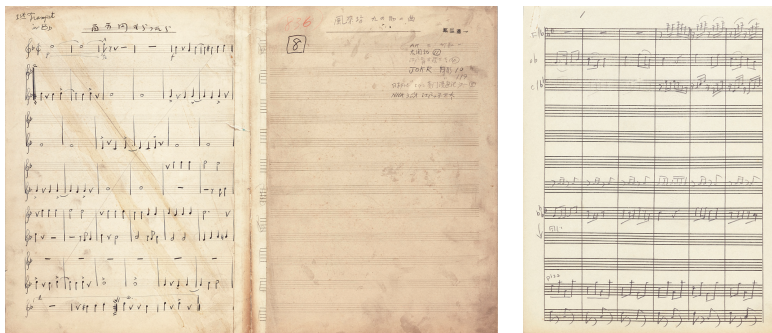


図1 『楽譜 風来坊九の助の曲』（カバー、手稿総譜）[KRH47793\_0001, 0025]  
Gakufu fūraiō Kyū no suke no kyoku (Musical score: The song of Kyunosuke the Wanderer) (cover, full score manuscript)

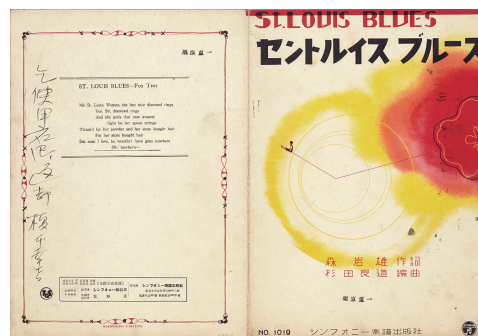


図2 『セントルイス ブルース』表紙 [KRH47726\_0003]  
St. Louis Blues (cover)



# 公募研究 3

## 映画宣伝資料を活用した無声映画興行に関する基礎研究

研究代表者：岡田秀則（国立映画アーカイブ主任研究員）

研究分担者：紙屋牧子（武蔵野美術大学非常勤講師）、柴田康太郎（早稲田大学演劇博物館次席研究員）

### 【研究目的】

本研究は、演劇博物館が所蔵している「大正・昭和初期映画館チラシ」の調査を行い、国立映画アーカイブ所蔵の同時代の映画宣伝資料との比較検討を通じて、日本の無声期映画興行に関する基礎研究を進める。同時代は映画館ごとに専属の活動写真弁士と音楽伴奏を付した興行が主流であり、また独自のプログラムであることも多く、それらを網羅的に把握するのは困難と言えるが、その様相の一端を捉えるための手がかりとなるのが、今回の調査対象となる映画館チラシとその他の映画宣伝資料である。本研究では、これらの資料を読み解くことにより、無声期映画興行の実態を解明することを目指す。

### 【研究成果の概要】

本年度は当研究チームが研究対象とする約千点の「大正・昭和初期映画館チラシ」のデジタル化された画像を元に同資料の全貌を把握すると共に目録の完成に向けた調査・検討を進めた。併せて、国立映画アーカイブを中心に、他施設が所蔵する関連資料の所蔵調査・資料収集もおこなった。

草創期の日本映画の興行に関する研究は国内外で活発化していると言え、今後の映画学発展への更なる貢献が期待できる一方で、ノンフィルム（映画関連）資料のうち映画館プログラムやチラシといった映画宣伝資料は、これまで収集・研究対象として必ずしも優先順位の高いものとして認識されてこなかった。従って国立映画アーカイブ等にとっても未だ検討すべき課題を残してい

るという現状をふまえ、目録の整備に向け予め十分な検討をおこなうための研究会（対面およびオンライン）を12月23日に演劇博物館にて開催した。研究会では、ノンフィルム資料の整理に長年携わってきた、佐崎順昭（研究協力者／国立映画アーカイブ客員研究員）による「演劇博物館所蔵「大正・昭和初期映画館チラシ」のカタログ化と研究活用：国立映画アーカイブの事例と比較して」というテーマでの講演のほか、映画宣伝資料の調査・分析を通じた映画史研究の新たな可能性等について意見交換をおこなった。研究会ではさらに、演劇博物館が所蔵する無声期の映画館で使用されていた楽譜（ヒラノコレクション）と関連付けた研究の可能性や、無声期の映画館情報の網羅化の必要性についてなどの検討も為され、後者については、大正末期刊行の映画年鑑などを元にした映画館リストの作成に着手するに至った。

以上の成果は、岡田秀則、紙屋牧子、柴田康太郎、白井史人（研究協力者／名古屋外国語大学）が登壇し3月11日に開催予定のオンラインによる公開研究会「演劇博物館所蔵「大正・昭和初期映画館チラシ」が埋める無声映画史の隙間」にて公表する見込みである。



浅草公園 三友館のチラシ (1925年) [NFM075-001]  
Flyer of Asakusako-en Sanyu-kan in 1925



神田日活館のチラシ (1927年) [NFM001-001]  
Flyer of Kanda Nikkatsu-kan in 1927



## 役者絵本の研究

研究代表者：桑原博行（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）

研究分担者：岩田秀行（跡見学園女子大学文学部名誉教授）、倉橋正恵（立命館大学衣笠総合研究機構プロジェクト研究員）、加藤次直（東海大学現代教養センター准教授）、齊藤千恵（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、中村恵美（立命館大学衣笠総合研究機構客員協力研究員）、桑野あさひ（日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター）

### 【研究目的】

役者絵本は、歌舞伎役者の肖像を主材とした絵本であり、ある種の役者名鑑的な要素も持ち合わせている。元禄期から近代まで長期にわたってその出版が見られ、各時代に活躍した役者の絵姿が確認できる。各時代の役者絵本を調査集成し、その画像データによって、各時代時代の役者とその似顔が判別可能となるような基礎資料を供することが本研究の目的である。特に、演劇博物館では、著名な役者絵本のほとんどを所蔵しており、研究進行に伴い蓄積される演劇博物館の資料群をデータ化し、資料目録を併せて公開する等の成果発信をおこなう。

### 【研究成果の概要】

本年度は、研究対象とすべき役者絵本基本目録の作成が完了した。また、そのうちの演劇博物館所蔵の役者絵本16点（26冊、1,119コマ）の撮影を行って、研究及び公開用の基本資料を整えるとともに、研究分担者がそれぞれ担当を決め内容解説作業を進めた。

役者絵本は、そのほとんどが版本であるため、他機関にも所蔵はあるが、多くは単独である。しかし演劇博物館は役者絵本のほとんどを、しかも複数（多いものでは10セット以上）所蔵しているのが特色である。調査の結果、伝来の好い本が多く、今回の調査範囲では、坪内逍遙旧蔵本として『俳優楽室通』『俳優三階興』『戯

子卅二相点顔鏡』『俳優相貌鏡』『歌舞妓雑談』『劇場一観顕微鏡』『三都俳優水滸伝』、伊原青々園旧蔵本として『戯子卅二相点顔鏡』『歌舞妓雑談』、幸堂得知旧蔵本として『役者夏の富士』、安田善次郎旧蔵本（さらに古くは石塚豊芥子旧蔵）として『<sup>役者</sup>水面鏡』、石橋幹一郎旧蔵本として『絵本舞臺扇』等が確認出来た。特に貴重なものとしては、勝川春章画『役者夏の富士』（安永9年[1780]）であろう。この本には役者名が書かれておらずその判定が難しいが、その総てにわたって歌舞伎通の旧蔵者幸堂得知が役者名を付箋で貼り込んだものである。

内容検討の結果では、安田文庫旧蔵の『<sup>役者</sup>水面鏡』は2セットあり、一本は稀書複製会本の底本と思われるが、もう一本には『水面鏡』と同シリーズの、今まで知られていなかった別本が含まれていることが分かった。また『芝居細見三葉草』と『三芝居細見』とは「日本古典籍総合目録データベース」では別に立項されているが、同一のシリーズで、途中国貞の挿絵が加わってから三座出演の役者似顔や三座の上演実態を反映した舞台図が描かれ、評判記や絵本では得られない情報を有していることが分かった。

来年度は、演劇博物館の未撮影分、および他機関の所蔵本の調査撮影をも行い、演劇博物館に所蔵のない本をも含めて役者絵本基礎資料として成果を発表できるように研究を進める予定である。



勝川春章画『役者夏の富士』の幸堂得知書き入れ [ro15-00586\_020]  
Annotations by Kōdō Tokuchi in *Yakusha natsu no fuji* (Actors like Fuji in Summer), illustrated by Katsukawa Shunshō



『<sup>役者</sup>水面鏡』の未紹介別本部分 [i11-00807\_014]  
Dobblue-page spread of a previously unintroduced book in the same format as and incorporated into *Yakusha miburi himokagami*



公募研究

5

## 坂川屋旧蔵常磐津節正本板木の基礎的研究

研究代表者：竹内有一（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）

研究分担者：鈴木英一（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、常岡亮（常磐津協会理事）、阿部さとみ（武蔵野音楽大学非常勤講師）、前島美保（東京藝術大学非常勤講師）

### 【研究目的】

坂川屋は、幕末の1860年に板株を常磐津正本板元の伊賀屋から受け継いで再刊を続け、以後昭和期まで新刊も行い、昭和62年頃まで板木で稽古本を刷り立てた板元である。江戸期創業の木版印刷業として最後まで板木を刷り続けた板元の一つとみられ、坂川屋に赴いて稽古本を仕立ててもらった経験を有する常磐津節伝承者も、今なお少なくない。本研究は、この板元が所蔵した板木、約800点の資料群を研究対象とし、その目録を作成、公開することによって板木群の全貌を明らかにすることを目的とする。2020年度は名題単位の簡易目録、2021年度は板木一枚ごとの詳細目録の作成を目指す。

### 【研究成果の概要】

今から20数年前の1994年から1996年にかけて、鈴木と竹内は、旧坂川屋板木の保管者らの意向を受け、本研究対象資料である板木群の予備調査を行い、その成果を1996年9月楽劇学会第13回例会において板木の名題一覧を添えて報告した縁がある。その後ほどなく鈴木と竹内の尽力により演劇博物館へ寄贈された板木群は、その量の多さ、素材的な扱いにくさ、デジタル化がいまだ普及していなかった時代背景を要因とし、長らく演劇博物館の収蔵庫で眠っていた。

よってまずは板木群の予備調査から演博に寄贈されるまでの動向の整理、寄贈後から現在までの資料群の保存概況の調査、演博による板木撮影データと板木現物および整理番号との照合を行うことから調査研究に着手した。

重くてかさばる板木の出納に際しては図書館および演劇博物館の担当者に多大なご負担をかけたが、その甲斐あって板木撮影データと板木現物との照合、板木の現況確認を進めることができた。それによって、目録編集作業に不可欠である撮影番号と旧板木番号の対応リストの作成、撮影データの不備（未撮影ないし撮影データが存在しない板木があること）の確認と今後の撮影方針の検討、板木の保存状態の確認（損傷や劣化の有無）を遂行した。

以上のような作業と現存する撮影データ、前述の予備調査時の調査データを総合して資料台帳（データベ

ス）を作り、それをもとにして、2020年度の目標である簡易目録を作成した。目録は冊子媒体で公開される予定である。

今後2021年度には、板木1枚ごとの書誌的精査を進め、それをもとに詳細目録を作成し、併行して、常磐津稽古本の出版システムを板木の側面から考察、近世邦楽ひいては近世の文芸・社会における板木の存在意義と価値について多角的な考察を深めていきたい。

なお、研究協力者の重藤暁（江戸川大学非常勤講師、早稲田大学エクステンションセンター講師）、小西志保（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究員）の両氏には、板木の書誌的調査の補佐、データ作成等でたいへんお世話になった。



常磐津稽古本「家桜廊掛額」（いえずくらくるわのかげぐ）の初丁にあたる板木（写真は左右反転）。本文は板木の両面に彫られ、本曲では2枚4面（本文全4丁）で構成される。明治3年（1870）3月守田座初演、5世尾上菊五郎の助六の出端に使用された曲で、内題下に版刻される狂言堂左交の作詞、6世岸沢式佐の作曲。舞踊は大阪の山村流などに残る。浄瑠璃方の常磐津派と三味線方の岸沢派が分離していた時期の岸沢派の作品であるため、のちに初刊時の内題下を修刻して常磐津の直伝名とした痕跡が板木に残る。[登録番号] 29888-737 (31-01)

A woodblock that corresponds to the first printing of the *tokiwazu-bushi* practice book *lezakura kuruwanokakegaku* (horizontally flipped photo). The text is engraved on both sides of the woodblock, and the song consists of four pages on two sheets (four sections of text in total). This song was used at the beginning of *Sukeroku* by Kikugoro Onoe V, which premiered at the Morita-za in March 1870 with lyrics by Kyogendo Sako and music by Kishizawa Shikisa VI, whose names are engraved under the title. The dancing still remained in the Yamamura style of Osaka. This is a work of the Kishizawa school during the time that the *tokiwazu-bushi* school of *yoruri* and the Kishizawa school of shamisen were separate, and the woodblock displays signs that it was reprinted with the name *tokiwazu-bushi* added under the original title.

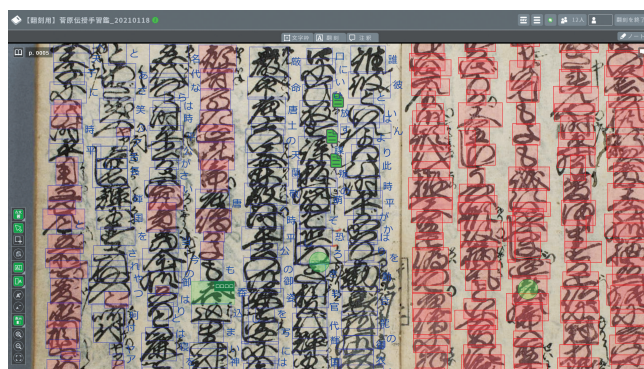
## 拠点主催事業

コロナ禍によって対面での共同研究の実施が難しくなった2020年度、本拠点ではデジタルデータを活用した共同研究を推進しました。しかし、ウィズコロナ／アフターコロナ時代にはこうしたデジタルデータを活用した共同研究がさらに発達することが予想されます。そのため、本拠点は本年度、演劇博物館および本拠点がこれまで蓄積してきたデジタルデータの新たな活用方法を開拓すべく、以下の取り組みを実施しました。

### くずし字判読支援事業

本拠点は機能強化支援を受けた2016年以来、凸版印刷株式会社（以下、「凸版印刷」）とともに「くずし字判読支援研究」を続けてきたが、今年後はこの教育利用の展開可能性を探った。本拠点ではこれまで、浄瑠璃丸本や歌舞伎番付の資料を翻刻とともに表示して閲覧できるWebビューアで成果公開を行ってきた。2020年度には、これまで蓄積した浄瑠璃丸本の「くずし字字形データ」を凸版印刷が開発した新たなオンラインくずし字翻刻支援システムと組み合わせることで、機械的判読システムをツールに用いて古典籍資料の読解を行うことの可能性や意義を検証した。このシステムはコロナ時代で余儀なくされたオンライン授業に対応したものであったため、本年度は早稲田大学の授業内で大学院生を対象に2020年11月と2021年1月の2回、ワークショップを実施した。この取り組みは、独力で古典籍と対峙して翻刻を試みることと共同で翻刻を行うことそれぞれの魅力や教育的意義を浮かび上がらせ、学生や海外か

らの留学生たちからも極めて好評を得た。また、次年度以後のより効果的・効率的な運営を目指して、Zoomなどのオンライン会議ツールとの併用方法や進行に関する基本的枠組みの再検討を進め、今後このようなワークショップを広く公開していくための準備を行った。



くずし字ワークショップ・オンライン翻刻画面  
Screen in Kuzushiji Diciphment Online Workshop

### ジャンル横断的な舞台芸術の公演情報に関する研究

本拠点では積極的に資料のデジタル化とデータベース公開を推進しているが、多岐にわたる演劇資料のデータベース公開においては一般に、著作権の問題や資料のメタデータの記録方法に様々な課題がある。折しも2020年度には、文化庁の文化芸術収益力強化事業に採択された寺田倉庫株式会社を中心とする「緊急舞台芸術アーカイブ＋デジタルシアター化支援事業（EPAD）」の一環として、演劇博物館は舞台芸術の公演記録映像のメタデータを検索する特設サイト「Japan Digital Theatre Archives(JDTA)」を構築した。

この検索サイトの設計過程でも、演劇、伝統芸能、ダンス等の各芸術ジャンルによって異なる舞台公演をめぐる情報プラットフォームの必要性が顕在化していた。こうしたなか12月24日、本拠点では学内外の研究者を招き、オンラインと対面を併用して「舞台芸術におけるメタデータについての意見交換会」を開催した。舞台に関する公演、上演、作品、制作者等のさまざまなメタデータをジャンル横断的に、かつ汎用性のある仕方で蓄積する方法を具体的に検証し、今後のデータベース連携のための課題を明らかにした。

### デジタル化されたサイレント映画の活用

演劇博物館がこれまでデジタル化した映像資料を活用し、演劇・映像分野の裾野を広げるべく、古い映像資料資源を現代に甦らせる取り組みを行った。フィルムの繋ぎ間違いによって物語の順序が誤った状態で保存されていた新派映画『生さぬ仲』（1916年）を対象として、デジタルデー

タ上で場面順序の修正を施し、欠落部分を字幕で補った。その上で、弁士の片岡一郎氏や邦楽演奏家の堅田喜三代氏らに映像の音響演出を依頼し、その収録を行った。この成果は2021年度の企画展示に関連して一般公開することを予定している。





# Mission and Vision

Leader of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts

Minako Okamuro

The Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, managed by the Tsubouchi Memorial Theatre Museum, has developed activities since it was certified as a Joint Usage / Research Center by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) in fiscal year 2009. The main feature of this Center is that the Theatre Museum with more than one million materials is our parent organization, and we will be able to provide valuable undisclosed or unreleased sources at the museum, which have not been fully utilized academically so far. Based on the evaluation of our various research achievements, we received the third certification from MEXT and started new activities in fiscal year 2020.

However, due to the spread of the COVID-19 pandemic in 2020, it has become difficult to conduct in-person joint research with primary materials at hand, as had been the case in the past. In the face of this challenge, the Center has developed a system that allows joint research to continue remotely during this crisis through the use of digital images of primary materials and online video/audio conferencing tools.

As part of this effort, as the subjects of our joint research projects, we have selected those primary materials that have been digitized but not yet released on our database, as well as those that are being digitally imaged for the first time. This allowed the Center to select, as a principal research theme, a research project focused on manuscripts held in the Minoru Bestuyaku collection. The Center selected five research teams featuring five following materials: 1. Materials related to the Ernie Pyle theater, 2. Musical scores held in the former Shigekazu Kurihara collection, 3. Pre-WWII movie theater publicity materials, 4. Picture books of actors, and 5. Original printing blocks used to print books containing *tokiwazu-bushi*, as the projects selected from the proposals submitted by nationwide researchers, the main prerequisite of which was the effective use of the Museum's research resources.

Moreover, in 2020, we established two additional research categories. The first is an "encouragement research project," designed to survey theater and film

materials in preparation for future joint research conducted by young scholars at the Theatre Museum. Six projects have been selected. The second is an "urgent theme research" project, which was conducted as a joint study that surveys and records the status of performing arts culture during the COVID-19 pandemic. Specifically, it was a joint research project that surveyed information about and trends in stage productions in Japan and overseas that have been cancelled or postponed due to the pandemic. Another project included a survey of COVID-19 preventative measures that have been implemented at museums, art museums, and libraries. The online exhibition that featured the results of this research project, entitled "Lost in Pandemic," was widely covered by the media.

In addition to these research projects conducted by joint research teams, we are also looking toward the development of future research projects that utilize digital data, and have investigated and pioneered methods of utilizing the digital data we have accumulated over the years. Specifically, 1. a workshop to demonstrate the educational use of the results of the *kuzushiji* OCR project, which has been under way since 2016 in conjunction with Toppan Printing Co., Ltd. and which uses digital images of *yoruri maruhon*(reciter's books); 2. a conference on issues related to the accumulation and potential uses of cross-genre meta-data of stage productions; and 3. utilization of old film materials by correcting order and supplementing intertitles in digital data, and recording music and *benshi* (silent film narrators) narrations for use in exhibitions.

The Center has conducted trials for the purpose of starting its third period of activities during the COVID-19 pandemic. These trials were performed using an abundance of digital data and knowhow related to digital archives that has been accumulated by the Theatre Museum over the years. This has allowed us to develop new ways of fulfilling our function as a Joint Usage / Research Center, which in turn has led to a multitude of academic results. We continue to dedicate ourselves to creating novel research methods, and are greatly appreciative of the continued support and cooperation we receive from a wide range of individuals.

During fiscal year 2020, the Center conducted surveys of stage productions in Japan and overseas during the COVID-19 pandemic and surveyed preventative measures that have been implemented at museums, libraries, and art museums. These projects are named as the “urgent research project.” In addition, the Center has also established a research category named as the “encouragement research project,” which is a joint research project that is to conduct basic surveys. These projects have been established to further augment the research conducted by the Center.

### Urgent theme research 1

---

#### Survey study of the impact of the novel coronavirus pandemic on Japanese theater

Principal Researcher: Ryuki Goto (Assistant Professor, Theatre Museum, Waseda University)

Collaborative Researchers: Hiroshi Takahagi (Vice Director, Tokyo Metropolitan Theatre), Yoichi Uchida (Arts Journalist), Takayuki Ako (Curator, Informatics Systems Management Curatorial Planning Dept., Tokyo National Museum), Yusuke Hashizume (Chief Editor, Bijutsutecho Online, Bijutsu Shuppan-sha Co., Ltd), Misa Umetada (Associate Professor, Department of Psychology, Ochanomizu University)

Beginning in late February 2020, Japanese performing arts were rocked by the rapid spread of novel coronavirus infections (hereafter, “coronavirus crisis”), and many performances were forced to cancel or be postponed. The April 7 State of Emergency Declaration stemming from the Special Measures Act hit especially hard, resulting in a variety of cultural industries ceasing to function. It was subsequently extended piecemeal and finally lifted on May 25. Although there has been a gradual movement towards reopening in the performing arts with careful measures taken following government guidelines, performances feel as if they are treading on thin ice, with infections occurring among industry professionals and overall case numbers rising in Japanese society.

This study involved information-gathering and the collection of material on the cancelation and postponement of performances due to the coronavirus crisis primarily through a fact-finding survey. It was intended to historicize the impact of the coronavirus crisis on “the present” from the perspective of theater. Furthermore, it consider unrealized 2020 performances not as merely an insider “memory” of those in the performing arts but as a matter of public “record” to be passed on to future generations. Specifically, in addition to building lists of canceled or postponed performances and creating a chronological table, we exhibited some results of our research in an online exhibition, “Lost in the Pandemic: Archiving Theatrical Memories and Records of 2020” (<https://www.waseda.jp/prj->

[ushinawareta/](https://www.waseda.jp/prj-ushinawareta/)), which opened on October 7, six months after the emergency declaration.

At first, there were 63 images of flyers and posters that had been released. However, as of January 5, 2021, this number has risen to 150 (in actuality, more than 620 artifacts have been provided, including flyers). Comments by performing arts professionals are also included with the aim of archiving memories using the words of those impacted by the pandemic. Additionally, many have communicated about how the coronavirus crisis has impacted not only individual performances but also the entire performing arts worlds.

According to a survey conducted by the museum, more than 800 performances (counted by titles, not by the number of staging) have been canceled or postponed since late February. However, we were unable to request material from all of them, and so, many performances were not included in the survey. We intend to continue our fact-finding survey of canceled and postponed performances, collect materials in cooperation with relevant organizations, and update the online exhibition as needed.

In addition, for the 2021 Spring Exhibition, we plan to display the actual items using information, findings, and resources obtained from this study. We hope to highlight this era of the coronavirus crisis through the performing arts. Regarding online exhibitions and item displays, we will explore plans and make preparations by consulting the co-researchers of this study, all of whom are specialists in their fields.

### Urgent theme research 2

---

#### Performing arts in the age of COVID-19: in Europe and the US

Principal Researcher: Masaru Ito (Research Associate, Theatre Museum, Waseda University)

Collaborative Researchers: Ken Hagiwara (Professor, School of Global Japanese Studies, Meiji University), Shintaro Fujii (Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University), Yoichi Tajiri (Professor Emeritus, Kansai Gaidai University), Yoko Totani (Professor, Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University), Sayano Osaki (Italian Theatre Researcher), Sahoko Tsuji (Assistant Professor (without tenure), Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University), Rina Tanaka (Assistant Professor, School of Global Japanese Studies, Meiji University)

This research project surveyed culture-related policies and the current status of performing arts in countries in Europe and the US (France, Germany, Austria, Spain, Italy, the UK, the US, and Russia) during the COVID-19 pandemic. Since there is

a wide variety of culture-related policies and diverse range of circumstances under which the performing arts in each country operates, each participant specialized in surveying the major urban areas of their own language region, and monthly seminars



---

have been held online since September 2020. The report on the current status of the performing arts outside Japan will be available to readers in Japan through a variety of media. The objective of this themed research project is to ascertain the current status of the performing arts around the world over the mid- and long-term, with a focus on culture-related policies as viewed from the perspective of their broad relationship to society as a whole.

In the European/US regions, the first wave of the COVID-19 pandemic began in mid-March. Since that time, policies designed to aid cultural activities were swiftly implemented, and the governments of countries around the world have taken the lead in protecting cultural activities. For example, France and Germany each announced large-scale emergency assistance policies on March 18 and March 23, respectively. However, the situation cannot simply be described as one in which these cultural policies have provided “generous support.”

Moreover, it has been pointed out that, in contrast to France and Germany, Russia seems not to have implemented any clear assistance policies. Moreover, in comparison to Germany, where local and regional governments are in charge of cultural policies, in Austria, the federal government is in control of its cultural policies. This demonstrates that even within each country there are vast differences between individual cultural policies. With no end to the pandemic in sight, this themed research project can only be implemented on a limited basis, but by making a record of what is understood as “culture” and how it is being addressed during the pandemic in countries around the world, we hope that we can leave data that can be used in future studies, and thereby, make our own contribution to society. The results of this themed research project are scheduled to be publicized on the website of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts and will be made available at the 2021 Spring Exhibition.

## Urgent theme research 3

---

### Survey of COVID-19 preventative measures at museums, art museums, and libraries

Principal Researchers: Yuki Sato (Conservation Staff, Theatre Museum, Waseda University), Nozomi Kuri (Conservation Staff, Theatre Museum, Waseda University)

As the COVID-19 pandemic became increasingly widespread, the Theatre Museum was forced to close its doors over the long-term. The conservation staffs of the Museum took the opportunity provided by the closing of the Museum to survey policies that the Museum would have to implement once it reopened, as well as anti-infection policies related to the handling of materials. They collected data regarding measures designed to allow museums and similar institutions to reopen, mainly from the websites of groups related to museums, art museums, and libraries. The survey used May 14 as a cutoff date as this was the date by which basic anti-infection policies were publicly released by the Japanese Association of Museums and the Japan Library Association. The results of the survey were immediately released on May 19 in the “Report on the

survey of COVID-19 preventative measures at museums, art museums, and libraries,” which was publicized on the website of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts. In addition to a “survey list” of COVID-19 preventative measures publicized by groups related to museums, art museums, and libraries both in Japan and overseas as of mid-May, the report also includes a description of trends identified in the preventative measures, and, in an effort to facilitate the sharing of information among institutions, it also functions as a record of this period of trial-and-error for future use. In addition to a summary of the report, the Museum’s annual report, *Enpaku Book*, includes information – based on trends identified following the release of the report – on the isolation and disinfection of materials as yet another infection prevention measure.

## Encouragement research project

---

Since fiscal year 2020, scholars at the Theatre Museum have been conducting a project at the Center, named as “Encouragement Research Project,” which is a survey of materials related to theater and film for the purpose of use in future joint research projects. In 2020, the first year the project was implemented, six research themes were selected: 1. “Survey and study of basic materials of the *Taikoki* drama in early modern theatre: Focusing on *ningyo joruri*” (Masumi Harada); 2. “Yoshi Hijikata’s life in Moscow” (Masaru Ito); 3. “Study of the *shinpa* theater during WWII using a survey of materials related to Yaeko Mizutani I” (Ryuki Goto); 4. “Basic research on the

representation of sexual minorities in the Japanese film industry: Production, exhibition, and interpretation” (Yutaka Kubo); 5. “The acceptance of *The Peach Blossom Fan* in modern Japan: Focus on Tokyo Vocational School” (Shikan Lee); and 6. “The exhibition of films and staging of attractions at Shochikuza Theater chain” (Kotaro Shibata). Through these projects, a wide variety of materials held by the Theatre Museum were examined. The fourth theme in particular led to an exhibition held during fiscal year 2020 at the Theatre Museum, and the third theme is scheduled to be part of an exhibition of related materials during the next fiscal year.

○ Principal research

The principal research involves a joint research project on the theme proposed by the Institute, which researchers were encouraged to participate in. The titles and affiliations of the project members shown below are those for the year in which the project started.

Principal research

1

## A study of the collection of the autographed manuscripts of Minoru Betsuyaku

Principal Researcher: Itsuki Umeyama (Associate Professor, Department of Performing Arts, Faculty of Literature, Arts and Cultural Studies, Kindai University)

Collaborative Researchers: Minako Okamuro (Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University, and Director, Theatre Museum, Waseda University), Ryuki Goto (Assistant Professor, Theatre Museum, Waseda University)

### Research objectives

This study verifies the writing style of Japanese playwright Minoru Betsuyaku through the survey of the Collection of the Autographed Manuscripts of Minoru Betsuyaku, donated in 2019, and materials related to his works. When Betsuyaku first started writing, he was influenced by the Theatre of the Absurd, as exemplified by playwright Samuel Beckett, while simultaneously taking an interest in the literary works of the likes of Kenji Miyazawa, nursery rhymes, songs, and old-style poems, incorporating them into his writings. This practice became even more pronounced from the late 1990s onward. In this study, we confirm which non-theatrical writings influenced Betsuyaku's own style and how they connect to the theatrical structure and sense of language Betsuyaku acquired from the Theatre of the Absurd.

### Summary of research

The Collection of the Autographed Manuscripts of Minoru Betsuyaku mainly comprises drafts of theatrical works. After being donated, it was organized by Ryuki Goto, who is also a co-researcher of the present study. The unpublished works contained therein gained significant interest after being published in the magazines in 2020. Thirty-seven of the 101 manuscripts remain unpublished, and there are additional donated materials that have yet to be examined.

This year, a total of five material surveys were conducted, as well as interviews with Mr. Akihito

Noda, one of the former editors of the special interest magazine *Kikan hyoron* (*Quarterly Review*, 1969–1986), in which Betsuyaku was deeply involved. *Kikan hyoron* is a valuable resource for identifying how Betsuyaku was influenced by the Theatre of the Absurd through his review work. Mr. Noda kindly advised us on other people with whom we could talk about Betsuyaku's influence upon this magazine. We hope to conduct interviews with these people as soon as possible next year, when the COVID-19 situation has improved.

This year's material survey has not been scrutinized in detail, as it is intended as a big-picture assessment. However, it clearly contains important materials related to Betsuyaku's early works from the 1960s. Additionally, valuable materials were discovered that traced his writing process from start to finish, including collected texts from his teenage years, creative writing notebooks believed to be from his 20s, and a map Betsuyaku himself worked on for his *Soyosoyozoku* series.

Next year, we plan to carefully examine the collection with a focus on these valuable materials, while simultaneously holding a Minoru Betsuyaku exhibition as a special event of the Theatre Museum, accompanied by a wide release of survey results. We would like to thank the secretariat of the Center for their cooperation in the undertaking of this study. We also greatly appreciate the cooperation of the museum staff in organizing the materials, which allowed the survey to proceed efficiently.



○ Selected research

The selected research consists of joint research projects derived from the reviewed proposals, which aim to promote the effective use of the Theatre Museum's collections. The Institute provides a venue and materials for these joint research projects. The titles and affiliations of the project members shown below are those for the year in which the project started.

Selected research

1

## Foundational research on the Ernie Pyle Theater based on the Senda Collection: A record of Michio Ito's dance practice and genre-crossing performances from 1946 to 1948

Principal Researcher: Kiyomi Kushida (Associate Professor, Department of Aesthetics and Art History, Jissen Women's University)

Collaborative Researchers: Sayaka Yamada (Assistant Professor, Department of Child Studies, Japan Women's University), Tara Rodman (Assistant Professor, Department of Drama, Claire Trevor School of the Arts, University of California, Irvine)

### Research objectives

The Ernie Pyle Theater was an Allied recreation facility during the postwar occupation period. It operated from December 24, 1945, to January 27, 1955, in the occupied Tokyo Takarazuka Theater. The artistic director of the theater, Michio Ito (1893–1961), was the older brother of actor and director Koreya Senda and had been active on Broadway and in Hollywood. The purpose of this study is to survey and analyze the materials related to Michio Ito contained in the Koreya Senda collection, in particular those concerning the Ernie Pyle Theater. Our aim is to re-examine the dance works of Ito, whose productions traversed various genres in postwar Japan.

### Summary of research

This year, we are proceeding with the digitization and cataloging of materials in the Senda Collection related to Michio Ito (hereafter, "J materials"), as well as surveying and examining materials that have already been digitized. The materials receiving particular attention in this study include documents related to the Ernie Pyle Theater, photographs related to Michio Ito and the resident dance troupe at the theater, scrapbooks featuring newspaper and journal articles, the script for "Tabasco," and Michio Ito's stage notes. By investigating these materials, we were able to clarify information about the internal management structure and production system of the Ernie Pyle Theater. Furthermore, we identified with relative certainty thirteen works that were created by the Japanese stage production staff and five that were created by Michio Ito between 1946 and the early half of 1948.

Rodman and Kushida, who are surveying the photographic records included in the *Senryō-ki Nihon kanren shiryō* ("Materials related to Occupied Japan") held by the US National Archives and Records Administration, concurrently conducted a comparative study of both sets of material in order to substantiate and accurately identify the works that were performed. The results showed that the photographs within the

J materials do not match the photographic records of the US National Archives and Records Administration, although similar photos are included in both collections.

Based on the above, we held an interim team briefing at the end of December. Having investigated the photographs of the Ernie Pyle Theater, Rodman referred to the connection between the characteristics of Michio Ito's repertory and dance style, his performed works, and the US Latin music and cultural boom. Specifically, she indicated that certain photographs in the J materials, which bear the stamp of the US Army Signal Corps on the reverse side, would have been recorded by Signal Corps photographers to report back to the US on the conditions in occupied Japan. She also noted that the contemporary US "Latin boom" could be attributed to policies of the "Good Neighbor" era under the Roosevelt administration. The cheerfully unfolding Latin dance and rhythms of Ito's production "Tabasco" can thus be considered as devices to immerse the occupying soldiers in a moment of nostalgia and bliss.

Kushida used photographs from the J materials to identify the works and their periods of performance, finding that each set of materials contained different types of photographs in no particular order. By creating a chronological table of the performances, Kushida was able to confirm that they were strategically ordered in line with the development of Ito's resident dance company, which was formed through open recruitment. The table revealed that the performances proceeded chronologically in order of difficulty, beginning with "Japanese-style" pieces, progressing through folk dances, and finally moving to pieces in the "Western style." Kushida's results are summarized in "Stage Shows at the Ernie Pyle Theater" (*Jissen Women's University Aesthetics and Art History*, vol. 35, March 2021), and "The Production and Characteristics of Michio Ito's Dance Works: an Investigation of Stage Shows at the Ernie Pyle Theater Based on the Testimony of Those Involved" (*The Faculty of Letters of Jissen Women's University, Annual Reports of Studies*, vol. 63, March 2021).

## Research on musicians and musical bands through Kurihara's musical score collection: Music for stage and cinema during the early Showa era

Principal Researcher: Masaaki Nakano (Affiliated Lecturer, School of Arts and Letters, Meiji University)

Collaborative Researchers: Fumito Shirai (Lecturer, School of World Liberal Arts, Nagoya University of Foreign Studies), Yohei Yamakami (Project Lecturer, Komaba Organization for Educational Excellence, The University of Tokyo), Masato Mori (Independent Researcher), Hiroyuki Kojima (Doctoral Program, Graduate School of Arts and Sciences, the University of Tokyo)

### Research objectives

Shigekazu Kurihara (1897–1983) was a musician who was active during the early Showa period in the Enoken Orchestra and Shochiku Kinema's performance department, as well as the P.C.L. (Photo Chemical Laboratory) Film Studio in the early days of sound films. This study surveys and analyzes musical scores formerly belonging to the Enoken Orchestra and Shigekazu Kurihara (approximately 1,000 items). It uses the results of a basic survey of musical score material (approximately 700 items) conducted up to 2019 to combine contemporary documents and a survey of related musical score collections. Its aim is to use empirical research on the activities of Kenichi Enomoto (1904–1970) and other contemporaneous musicians and orchestras with whom Kurihara worked and, thereby, to broadly elucidate the creation and performances of contemporary theaters, music, and films across a wide range of genres.

### Summary of research

#### ○ Survey and analysis of musical score materials

Through a two-year research project ending last year, we created a catalog of 700 musical scores formerly belonging to Kurihara, including materials from both the initial purchase in 2016 and the second purchase made in 2017. We successfully surveyed the materials, which contain a mix of imported scores and manuscripts for different works. This year, mainly through the efforts of collaborative researcher Kojima, we created a catalog of digitized items and summarized approximately 200 new materials in the museum.

The newly digitized materials mainly include musical

scores found in surveys prior to last year and similar printed scores and manuscripts. Based on the results of interviews with Mr. Masahisa Segawa in 2019 and further surveys, it is highly likely that this collection includes scores that were originally from other collections but were later mixed after being transferred to Segawa following Kurihara's death. The progress of a systematic survey of the ownership stamps and musical scores enabled us to clarify the process by which these materials were collected, stored, and used. In the future, we plan to connect these findings to a survey of details about the writing, such as performance instructions and lyrics translated into Japanese.

#### ○ The digitization and examination of musical score collections and related materials from the same era

Of the materials formerly belonging to Segawa, we digitized materials related to Shigeya Kikuchi, a musician active in the same period as Kurihara, and a photo album related to Enomoto's stage performances, which was purchased last year. Furthermore, through internal online meetings, we convened a study session for the purpose of completing a report, which is to be held on February 15, 2021, and proceeded to examine the Kurihara collection and related materials. Despite the difficulties stemming from the COVID-19 crisis, some results have been achieved by cataloging via digitized materials and online meetings. In the future, we would like to explore how we might continue to conduct interview surveys, utilize performances and screenings to study musical scores, and conduct surveys at relevant museums.



## The basic research of silent film screenings using promotional movie materials

Principal Researcher: Hidenori Okada (Chief Curator, National Film Archive of Japan)

Collaborative Researchers: Makiko Kamiya (Part-time Lecturer, Musashino Art University), Kotaro Shibata (Junior Researcher, Theatre Museum, Waseda University)

### Research objectives

The purpose of this study is to survey movie theater flyers from the Taisho to the early Showa periods that are held by the Theatre Museum and, thereafter, comparatively study promotional materials from the same era held by the National Film Archive of Japan (hereafter NFAJ) and carry out the basic research of movie screenings in the Japanese silent film era. At that time, each theater had its own live performances, featuring its exclusive “benshi” narrator and musicians, as well as its own program. This makes it difficult to obtain a comprehensive understanding of screenings during the silent era; however, one step that may be taken is to examine the movie theater flyers and other promotional materials that are the subject of this survey. The aim of this study is to analyze these materials and, thereby, understand the actual circumstances of silent-era film screenings.

### Summary of research

This year, we conducted a survey study of digitized images of approximately 1,000 movie theater flyers from the Taisho to the early Showa periods in order to gain a complete picture of all the target materials of this team and begin a full catalog of them. We also surveyed related materials held by other institutions, such as the NFAJ, and collected additional materials.

While there has been active research into early Japanese film screenings both in Japan and abroad, there has been little recognition of the value of non-film (film-related) materials as a resource. Despite the likelihood that they could contribute to the further

development of film studies, promotional movie materials such as theater programs and flyers have not necessarily been prioritized as subjects for collection and study. Consequently, they remain a subject that has not been sufficiently examined, even by the NFAJ. As such, we convened a study group (in-person and online) at the Theatre Museum on December 23 for a thorough preliminary examination of how to catalog these materials. In this study group, a lecture was given by Yoriaki Sazaki (Research Collaborator/Visiting Curator of NFAJ) on the subject of “Cataloging the movie theater flyers from the Taisho to early Showa periods held by the Theatre Museum and using them for research: A comparison with the case of the NFAJ,” as well as an exchange of opinions on the new possibilities of film history research that can be facilitated by the survey and analysis of promotional movie materials. The study group also discussed the possibility of research related to musical scores (the Hirano Collection) formerly used in silent-era movie theaters and held by the Theatre Museum, and the need for comprehensive information on silent-era movie theaters. A decision was made to embark on the latter by creating a list of silent era movie theaters, informed by movie yearbooks published at the end of the Taisho period.

The results of the above are scheduled to be presented by Hidenori Okada, Makiko Kamiya, Kotaro Shibata, and Fumito Shirai (Research Collaborator/Nagoya University of Foreign Studies) at an online symposium, held by the Theatre Museum and tentatively titled “Promotional Movie Materials Filling Gaps in Silent Film History in Japan,” on March 11.

## A comprehensive study of actor picture books

Principal Researcher: Hiroyuki Kuwahara (Adjunct Researcher, Theatre Museum, Waseda University)

Collaborative Researchers: Hideyuki Iwata (Emeritus Professor, Faculty of Letters, Atomi University), Masae Kurahashi (Project Researcher, Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University), Tsugunao Katō (Associate Professor, Tokai University Center for Liberal Arts), Chie Saitō (Adjunct Researcher, Theatre Museum, Waseda University), Emi Nakamura (Visiting Researcher, Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University), Asahi Kuwano (Staff, Japan High Performance Sports Center, Japan Sports Council)

### Research objectives

Actor picture books are compilations of kabuki actor portraits that also contain features that serve as actor directories. They have been published from the late seventeenth century through modern times, and make it possible to discover information about actors of every era. The purpose of this study is to survey and compile information on actor picture books from each period and use this image data to provide basic material for identifying actors from each era. This study compiles data that has been gathered as the result of successive research based, in particular, on the actor picture books owned by the Waseda University Theatre Museum, since they hold most of the well-known titles. We will then share the results, and publish a catalog as well.

### Summary of research

This fiscal year, the basic catalog of actor picture books, which was the primary objective of this study, was completed. This included 16 actor picture books in the possession of the Theatre Museum (26 books; 1,119 digital images). In addition to preparing the basic materials for research and publication, the co-researchers decided on their respective responsibilities and prepared content descriptions.

Actor picture books were mostly printed by woodblock and exist in multiple copies; therefore, many institutions have one or more various examples. The Theatre Museum's collection, however, is remarkable in that it includes almost every book, and in many cases, multiple copies of each (in some cases, 10 or more copies of the same title). The survey results have also revealed that there are many books with excellent provenance. The survey confirmed that the former collection of Tsubouchi Shōyō includes the following titles: *Yakusha gakuya tsū* ("Actors in Their Dressing Rooms"), *Yakusha sangaikyō* ("Amusements of Actors on the Third Floor"), *Yakusha sanjūnisō tengankyō* ("Mirror Images of Thirty-Two Actor Faces"), *Yakusha awase kagami* ("Mirror Images of Actors"), *Kabuki zōdan* ("Chats on Kabuki"), *Gekijō ikkan mushimegane* ("A Look at the Theater through a Microscope"), and *Daitokai kabuki Suikoden* ("A Water Margin of Actors from the

Three Capitals"). The former collection of Ihara Seiseien includes *Yakusha sanjūnisō tengankyō* ("Mirror Images of Thirty-Two Actor Faces") and *Kabuki zōdan* ("Chats on Kabuki"). Meanwhile, Yasuda Zenjirō's former collection includes a copy of *Yakusha miburi himokagami* (previously owned by Ishizuka Hōkaishi), and the former collection of Ishibashi Kanichirō has a copy of *Ehon butai ōgi* ("Picture-Book of the Stage in Fan Shapes"). The former collection of Kōdō Tokuchi includes an annotated copy of *Yakusha natsu no Fuji* ("Actors Like Fuji in Summer"), illustrated by Katsukawa Shunshō (An'ei 9 [1780]). It is difficult to identify the actors in this book because their names are not transcribed; however, in this copy, the book's former owner, kabuki aficionado Kōdō Tokuchi, inserted handwritten notes with the actors' names, making it particularly valuable.

By carefully studying the contents of various volumes, we discovered a previously unknown book. The Theatre Museum owns two sets of *Yakusha miburi himokagami* formerly held by the Yasuda Library. One is believed to be a source of the book with the same title as *the Kisho Fukusei Kai* (Rare Book Facsimile Association) series, while the other was found to include a different, previously unknown book in the same format as *Himokagami*. Additionally, we confirmed valuable series. *Shibai saiken sanbasō* and *Sanshibai saiken* are also separately listed in the Union Catalogue of Early Japanese Books Database, but we found that they should be included in the same series. Also, they provide information that cannot be obtained from written commentaries and picture books, especially after Kunisada added illustrations that depicted portraits of actors appearing in the three major Edo theaters and stage maps reflecting actual performances at those theaters.

Next fiscal year, we plan to survey and photograph unphotographed works belonging to the Theatre Museum, as well as books held by other institutions, to continue the research and, ultimately, present the results of our compilation of basic data on actor picture books, including books not in the possession of the Theatre Museum.



## The basic research of tokiwazu-bushi woodblock printings formerly owned by Sakagawaya

Principal Researcher: Yuuichi Takeuchi (Professor, Research Institute for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts)

Collaborative Researchers: Eiichi Suzuki (Adjunct Researcher, Theatre Museum, Waseda University), Ryou Tsuneoka (Director, Tokiwazu Association), Satomi Abe (Part-time Lecturer, Musashino Academia Musicae), Miho Maeshima (Part-time Lecturer, Tokyo University of the Arts)

### Research objectives

At the end of the Edo period in 1860, Sakagawaya inherited the rights to republish the *tokiwazu-bushi* (musical texts of kabuki plays) originally published by Igaya. It subsequently published new works in the Showa period and did not stop making woodblock printings of kabuki rehearsal books until 1987. Sakagawaya appears to have been one of only a few Edo period publishers who continued woodblock printing to the end, and even today, those in possession of these texts consist mostly of persons passing on *tokiwazu-bushi* who had to go to Sakagawaya for their rehearsal books. The purpose of this study is to examine the approximately 800 woodblocks held by Sakagawaya and, by creating and releasing a catalog, to obtain a complete picture of them all. We aimed to create a simple catalog with listings according to titles in 2020, followed by a detailed catalog according to each woodblock in 2021.

### Summary of research

Some 25 years ago, from 1994 to 1996, at the request of the current owners of the Sakagawaya prints that are the object of this study, Suzuki and Takeuchi conducted a preliminary survey of the collection. The results were reported at the 13th Meeting of The Japanese Society for the History of the Performing Arts in September 1996, along with a list of the titles appearing in the woodblocks. Shortly thereafter, the woodblocks were donated to the Waseda University Theatre Museum as a result of Suzuki's efforts. However, due to their sheer volume, difficulties in handling, and the lack of widespread digitization, they remained untouched in the Theatre Museum for a long time.

Thus, we first commenced with a survey study, examining any developments between the the

preliminary survey and the donation of the woodblocks to the Theatre Museum, surveying the state of the preservation of materials from the time of their donation to the present, and then collating the Theatre Museum's photographic data of the woodblocks against the actual items and their tracking numbers.

Despite of the heavy and bulky nature of the woodblocks, thanks to the effort of the staffs of the Theatre Museum, we were able to successfully collate photographic data with actual woodblocks and verify their current status. This led to the creation of a list matching shoot numbers and the old woodblock numbers, which was indispensable for catalog compilation. We then checked for any incomplete photographic data (woodblocks that had either been left unphotographed or had no photographic data available), explored potential policies for future photography, and checked the preservation status of the woodblocks (whether there was any damage or deterioration).

The above work, existing photographic data, and data from the previously mentioned preliminary survey were combined to create a data ledger (database), which served as the basis for a simple catalog, which was the objective for 2020. This catalog will be published in the form of a booklet.

Looking towards the future in 2021, we will proceed with a careful bibliographical examination of each woodblock and use it to create a detailed catalog. In tandem, we shall consider the publishing system for *tokiwazu-bushi* practice books in terms of their woodblocks and pursue a multifaceted discussion of the significance and value of woodblocks in early modern Japanese music and, consequently, modern literary arts and society.

We would like to thank our research partners Gyo Shigefuji and Shiho Konishi for their assistance in bibliographic research of woodblocks and data creation.

## Projects organized by the Center

---

In 2020, the coronavirus crisis made it difficult to conduct joint research in person. Hence, we promoted joint research utilizing digital data, which is expected to see further development in the “with corona”/“after corona” era. This year we took the following actions to better utilize digital data previously accumulated by the Center and the Theatre Museum and to improve the application methods thereof.

## Project supporting the decipherment of *kuzushiji*

---

In 2016 we received support to enhance the functions of the Project Supporting the Decipherment of *kuzushiji* and, since that time, have explored possibilities for expanding the educational potential of the project, which is being maintained in collaboration with Toppan Printing Co., Ltd. (hereafter, Toppan Printing). Previously, the Center translated and released material, such as *yoruri maruhon* and *kabuki banzuke*, and made information on this work available via a dedicated web viewer. However, in 2020, the Center embarked on an initiative to utilize the accumulated *kuzushiji* character data from *yoruri* pieces for teaching and learning. By combining the new online *kuzushiji* decipherment support system developed by Toppan Printing and the character data, we used mechanical deciphering as a tool to verify the possibilities and

significance of comprehending *yoruri maruhon*. This system was perfect for the online support demanded during the age of the coronavirus. We conducted in-classroom workshops in November 2020 and January 2021 for graduate students at Waseda University. Attempts to tackle the translation of pre-modern books both independently and in teams revealed the appeal and educational significance of each approach, and proved to be extremely popular with regular students and those from abroad. In the coming year, we are aiming for greater effectiveness and efficiency by coordinating over Zoom and other online meeting tools and establishing a basic framework to ensure progress, thus laying the groundwork for holding such workshops on a wider basis in the future.

## Study of metadata of cross-genre performing arts

---

The Center is making active progress in digitizing material and making it available to the public via databases, but a wide range of theatrical material faces various problems, including copyright issues and difficulty in platform unification of cross-genre metadata. The Theater Museum was faced with the latter problem. As a part of “Emergency Performing arts Archive + Digital Theatre Project (EPAD),” which is centered on Terada Warehouse Co., Ltd. and was adopted for the Project to Strengthen the Earning Capacity of Cultural Arts of the Agency for Cultural Affairs, the Theater Museum created “Japan Digital Theatre Archives (JDTA),” a special site for searching metadata of video

recordings of the performing arts, but it became apparent that we needed an information platform for different forms of stage performances based on artistic genre, whether contemporary theater, traditional performing arts, or dance. On this occasion, we held the combined online and in-person Opinion Exchange Conference concerning Metadata in the Performing Arts on December 24 and invited researchers from inside and outside the university. The conference worked to specifically verify how to collect various metadata of productions, performances, plays, and creators in a cross-genre and versatile manner, as well as how to identify issues for future data-based collaboration.

## Utilization of digitized silent films

---

To provide a broader base for theater and film studies, we explored ways of utilizing old films that are owned and have been digitized by the Theater Museum. Featuring a silent movie *No Blood Relation* (1916) that is preserved with its story out of order due to errors in film splicing, we corrected its scene order using digital data and filled

missing parts with intertitles. Furthermore, we asked performers like the *benshi* Ichiro Kataoka and Japanese musician Kisayo Katada to provide a soundtrack in historical styles of the 1910s. The final product is expected to be unveiled to the public in 2021 in connection with a planned exhibition featuring *shinpa*.

---

編集：柴田康太郎 長谷川理絵  
翻訳：カクタス・コミュニケーションズ株式会社  
発行者：文部科学省「共同利用・共同研究拠点」  
早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点  
拠点代表：岡室美奈子  
早稲田大学演劇映像学連携研究拠点  
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学早稲田キャンパス6号館  
TEL: 03-5286-1829 URL: <http://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/>

---

Edited by: Kotaro Shibata, Rie Hasegawa  
Translated by: Cactus Communications  
Published by: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-Japan  
“Joint Usage / Research Center”, Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts,  
Theatre Museum, Waseda University  
Center Leader: Minako Okamuro  
Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Waseda University  
Building 6, Waseda Campus, Waseda University, 1-6-1 Nishi-Waseda, Shinjuku-ku,  
Tokyo, 169-8050  
(+81)3-5286-1829 URL: <http://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/>